経済理論学会６０周年記念大会向け発表概要

2019 年 10 月 19 日

「主義なき資本の時代が行き着く先は？～グローバル化の顛末～」
―発表要旨―

グローバル時代の到来とともに、資本は資本主義という名の枠組みを蹴破って経済ジャングルの真っただ中に躍り出た。「グローバル資本主義」という言葉が使われるが、それは幻想だ。資本が資本主義的再生産過程に投入されず、得手勝手に蠢く。それが現状だ。つまり、グローバル時代が資本を野生化させた。一種の先祖返りである。それと同時に、資本は著しく金融化の様相を深めた。その究極の発現形態がリーマン・ショックだったといえる。そして、資本は金融化すればするほど脱産業化する。経済の再生産能力をそぎ落としながら増殖していく。それが今日の資本だ。

この怪しげな資本がワイルドに暴走する中で、得体の知れない各種の「〇〇・エコノミー」が出現している。やれプラットフォーム・エコノミーだ、オンデマンド・エコノミーだ、シェアリング・エコノミーだという騒ぎが喧しい。それらの投網が経済活動を幅広く覆えば覆うほど、人々はギグ・ワーカーと化してその中にからめとられて行く。渡り職人とお座敷芸人のハイブリッド。それがギグ・ワーカーだ。彼らが構成するギグ・エコノミーにいかにして働く人々の人権が守られ、生存権が確立される状態を付与するか。このことが、主義なき資本との闘争の中で大きな要点になって行きそうである。

主義なき資本のやりたい放題は、グローバルな現象だ。だが、日本において、ことのほかタチの悪い状況が現出している。なぜなら、日本においては、主義なき資本が下心政治と出会ってしまっているからである。２１世紀版大日本帝国づくりを目論む政治が、主義なき資本とタイアップして、強くて大きくて、情け容赦なく弱くて小さき者たちを振り捨て、道具化する体制を構築しようとしている。

この状態から日本の経済社会を救出する。それが心ある人々の共通課題となっている。この課題にどうこたえるか。このことについて、当日の議論を通じて多面的に考えて行きたい。